

<b>Title</b>	『ケンブリッジ大学図書館蔵古英語版旧約聖書(七書)』における God の使用について
<b>Author(s)</b>	小林, 茂之
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学 : 論集, Volume29, 2015.3 : 132-144
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5508">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5508</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

---

## 『ケンブリッジ大学図書館蔵古英語版旧約聖書（七書）』における

### God の使用について

小林 茂之

#### はじめに

英語の世界語化が進んできた中で、God はキリスト教の「神」を表すことは周知のことになっている。しかし、古英語『ベーオウルフ』(Beowulf) に見られるように、この語は本来、キリスト教の「神」だけでなく、ゲルマン民族の異教の神をも表していた。この語が、キリスト教の「神」を表す代表的語として、今日のように使用されるようになったのは、いつ頃からであったのだろうか。この時期を初期英語文献において確かめてみることにする。この小論では、聖書が古英語に翻訳された歴史的背景を略述した上で、ケンブリッジ大学所蔵古英語版旧約聖書 (Old English Version of the Heptateuch) の写本 (MS. Cambridge University Library, II. 1. 33) における God の使用を通して、この問題を考察する。

## 一 英語の始まりとキリスト教の伝来

英語は、アングロサクソン人と呼ばれるゲルマン系の諸部族が、西暦四四九年にブリテン島に居留を始めた時に始まった。ベータ (Bede) による『英国民教会史』 (*Ecclesiastical History of the English People*) は次のように述べている。<sup>①</sup>

主のご托身から四百四十九年、マルキアヌスがアウグストゥスから数えて四十六代目の帝位を継承し、七年間これを保持した。この治世中にアングル人とサクソン人が先に述べた王「ヴォルティゲルン」に招聘されて三隻の大型軍船を率いてブリタニアに到来した。ただちにブリタニアのために戦ってほしいと要請され、居住地として島の東側の地を提供された。(『ベータ英国民教会史』、三八頁。「」内は筆者の補注)

アングロサクソン人は、現在のユトレヒト半島や大陸の周辺地域からブリテン島に渡ってきた。ローマ軍のブリテン島からの撤退後、『アングロ・サクソン年代記』 (*Anglo-saxon Chronicle*) によれば、彼らは、大陸から増援を得て、ローマ帝国の侵入以前よりブリテン島に居住していた、土着のブリトン人をウエールズ地方に追いやった。ブリトン人のケルト系の言語や文化は今もそうした地域に受け継がれている。<sup>②</sup>

こうして、ブリテン島にはアングロサクソン人による七王国が成立するが、その一つである現在のカンタベリがあるケントに、初代大主教となるオーガスティンが教皇グレゴリウスから派遣されてやって来た。<sup>③</sup> ケントの王は、

王妃がキリスト教徒であったために、キリスト教に理解を示し、オーガステイン一行を援助し、宣教の自由を与えた。そして、その王は、キリスト教に改宗し、ブリテン島のキリスト教化は成功したのであった。<sup>4)</sup>

こうして、キリスト教は栄えたのであるが、ヴァイキングの侵略を受けて、ブリテン島は荒廃した。教会や修道院もその例外ではなく、略奪され、多くの修道士たちも虐殺された。聖職者の教育の拠点であったリンディスファーン島にあった修道院(Lindisfarne Abbey)なども被害を受けたため、その影響は、聖職者の教育にも及んだ。以下は、『アングロ・サクソン年代記』の記事である。

793年。この年に、ノーサンブリアの上空に、不吉な前兆が現れ、悲惨なほど、住民をおびえさせた。それは、巨大な稲妻の閃光であった。また、火を吹く龍が、空中に飛ぶのが見えた。……その同じ年の1月8日に、異教徒が侵入し、略奪と殺戮によって、リンディファルネの神の教会に、惨憺たる破壊をおこなった。(大沢一雄(一九九二)『アングロ・サクソン年代記研究』、一八二頁)

こうしたヴァイキングの侵略は、以後全土に及び、アルフレッド王が統治したウエストサクソン地域だけがヴァイキングの支配を免れていた。アルフレッド王は、ヴァイキングを敗退させ、南イングランドの独立を守ることができたが、中部・北部の奪還は果たせず、「デーン法地域」として、ヴァイキングと妥協し、テムズ川以北の支配を認めることになった。

ヴァイキングの侵略は、イングランドのキリスト教に大きな変化をもたらした。オーガステインがカンタベリーで宣教を始めて以来、聖職者の教育はラテン語で行われていたのであるが、修道院の荒廃のためにラテン語の教育が

難しくなり、英語によって福音書の理解をする必要がある聖職者が多くなつた。アルフレッド王は、アルフレッド・サークルと呼ばれる学者たちと協力して、ラテン語文献を古英語に翻訳する活動に着手した。それは、ラテン語教育の体制が整わなかつた中で、イングランドの文芸復興を図るためであつた。

イングランドにおいて、古英語による聖書の翻訳が行われた背景には、ヴァイキングによる侵略があつた。その出来事は、またプロテスタント派が存在していなかつた時代において、一六世紀の宗教改革とは直接的には関係なく、ラテン語から現地語に翻訳が行われる契機になつた。イングランドのキリスト教は、一四世紀のウイクリフ(Wycliffe) 以前に、改革的動きへ向かつたのである。<sup>(5)</sup>

## 二 古英語版旧約聖書 (Old English Version of the Heptateuch) にこと

### 1 古英語による聖書の翻訳

アルフレッド王によってラテン語文献の古英語へ翻訳する事業が行われた中で、アルフレッドは「詩篇」の最初の五〇篇を古英語散文に翻訳し、その各詩篇の冒頭に短い解説を付けた。これは、古英語による完全な翻訳の最初のものとなつた。それ以前には、聖書のラテン語に古英語の語彙が付け加えることが行われていた。

「詩篇」が古英語翻訳の一つに選ばれた理由は、アルフレッド王がヴァイキングとの戦闘の中で一時は身を隠すことを強いられたので、ダヴィデ王のイメージに重ねられたために、「詩篇」が選ばれたと推測されているが、「詩篇」が聖職者教育において最も重要視されていたことも、その理由であろう。

古英語による聖書の部分的な翻訳は、*Genesis A*、*Genesis B*、*Judith* がよく知られているが、これらは韻文で

ある。散文による古英語への聖書のまとまった翻訳は、翻訳者が不詳である『ウエストサクソン福音書』(West Saxon Gospels)とアルフリッチ(Aelfric)が翻訳した『古英語版旧約聖書(七書)』(Old English Version of the Heptateuch)である。これらの散文による聖書翻訳は十一世紀に行われた。これは、後期古英語の時代に当たっている。

## 2 『ケンブリッジ大学図書館蔵 古英語版旧約聖書(七書)』について

これは、写本 MS. Cambridge University Library, H, 1. 33 の中に含まれている。この写本は、一五七四年にロバート・パスクリステイ・コレッジ学寮長を兼ねていた大主教パーカーがケンブリッジ大学に寄贈したものである。同大学図書館の写本カタログでは、以下のように記載されている。

A quarto, on vellum, 450 pages of 24 lines each, handwriting Normanno-Saxon, and ascribable to the early part of the xii century.

HOMILIES, PASSIONS OF SAINTS, AND OTHER SACRED PIECES, in Anglo-Saxon.

### 1. *The Twenty-four Chapters of Aelfric's translation of Genesis* (pp.4-44)

The text, though somewhat modernized, is substantially the same as that printed in the *Heptateuch*, ed. Thwaites, Oxf. 1698. *Aelfric's* dedicatory letter to the ealdorman Aethelweard is prefixed.

上の記述の要点は、「一二世紀初めのノルマン系の写字生による写本で、その最初の四一四四ページに『七書』

が置かれている。実質的に印刷された『七書』と同じだが、「いくらか当代化されている」ということである<sup>(6)</sup>。『古英語版七書』の現代の標準テキスト(Crawford(1922))は、大英図書館蔵の写本(MS. British Museum, ton, Claudius B. IV)とオックスフォード大学ボドリアン図書館蔵の写本(MS. Bodleian, Laud Misc. 509)を底本としている。つまり、ケンブリッジ大学図書館蔵の『七書』は、アルフリッチ(Ælfric)が原本を書いた時代から約一世紀後の一二世紀に作成されたのである。Crawford(1922: 424-425)は、ケンブリッジ大学図書館蔵の写本が他の二つの写本と全く異なる本文を持っている箇所を示している。以下に結論だけを引用する。

(1) Preface to Genesis, Gen. caps. i-iii, vi-ix, xii-xxii. 19

= Text identical with that of B and L.

(2) Gen. iv-v, x-xi. = Completely new text.

(3) Gen. xxiii-xxiv. = Text where C and B L are interdependent.

(Crawford(1922: 425))

Crawford(1922)とMarsden(2008)は、異本間の関係について考察しているが、詳論は省略する。

### 三 キリスト教の「神」を表す *God*

#### 1 *OEED* に於ける *God*

*god* は元来、ゲルマン語に起源を持ち、キリスト教の「神」に限定して用いられる語ではなかった。C D・R O 版 *OEED* は、キリスト教の神を表す *God* を以下のように記述している。

II.11 In the specific Christian and monotheistic sense. The One object of supreme adoration ; the Creator and Ruler of the Universe. (Now always with initial capital.) 5.II.5 As a proper name.

c825 Vesp. Psalter xlvi. 3 God [is] ... cyrning micel ofer alle godas.

*Vespasian Psalter* における *God* の用例は、*OEED* における初例であるが、*Vespasian Psalter* はラテン語の『詩篇』に古英語によるグロス (gloss) が行間に書き加えられたものである。同書で、キリスト教の「神」を表す一般的な用いられた語は、*drihten* である。

#### 2 『ケンブリッジ大学図書館蔵古英語版旧約聖書 (七書)』における *God*

大英図書館蔵の写本 (MS. B) とケンブリッジ大学図書館蔵の写本 (MS. C) の本文を比較してみよう。以下は、Genesis CAP. IV の冒頭の文である。



MS. B Soðlice Adam gestyrnde Cain be Euan his gemæccan, 7 ðus cwææs : Disne man me sealed Drihten.

MS. C Adam soðlice æfter þisum breac his wifes, 7 heo eachode 7 acende Cāin, 7 cwæð : Ic æfde mannan purh God.  
(Crawford (1922 : 91))

Latin Adam vero cognovit Havam uxorem suam quae concepit et peperit Cain dicens possedi hominem per Dominum (*Vulgate*)

“And Adam knew Eve his wife : who conceived and brought forth Cain, saying : I have gotten a man through God.” (*Rheims-Douay*)<sup>(2)</sup>

この箇所は、C写本が独自の本文を持っている箇所である。『古英語版七書』の標準テキストのB写本が *drihten* を用いているのに対して、C写本は *God* である。Crawford (1922 : 437) は、C写本が、B写本・L写本よりも好んで用いる傾向のある語の一つに *God* をあげている。

ただし、本文がほぼ共通している箇所では、両方ともに *God* が用いられている箇所がある。たとえば、Genesis CAP. II 18 では、B写本でも *God* が用いられている。

MS. B God cwæð eac swylce : Nis na god ðisum men ana to wunigenne ; uton wyrcean him sumne fulnum to his gelicysse.

Latin dixit quoque Dominus Deus non est bonum esse hominem solum faciannus ei adiutorium similem  
sui (*Vulgate*)

“And the Lord God said : It is not good for man to be alone : let us make him a help like unto  
himself.” (*Rheims-Douay*)

なお、『古英語版七書』と同時期に翻訳された『ウエストサクソン福音書』(*West Saxon Gospels*) では *drihten*  
が「神」の意味で用いられている<sup>(8)</sup>。

Lk. 1. 28 : Ða cwæp se engel ingangende, hal wes ðu mid gyfe gefylled. drihten mid  
þe ; Ðu eart gebletsud on wifum.

(Liuzza (ed.) 1994 : 99)

Latin et ingressus angelus ad eam dixit have gratia plena Dominus tecum benedicta tu in  
mulieribus (*Vulgate*)

“And the angel being come in, said unto her : Hail, full of grace, the Lord is with thee :  
blessed art thou among women.” (*Rheims-Douay*)

このことから、イングランド南部では、*drihten* が優勢であったのだと考えられる。

Crawford (1922) は、C 写本は写字生がたくさんの元の写本から選んで、作成したと考えているが、*God* の一貫した使用を好ましいと考え、B 写本とは異なる系統の写本を一部に採用したのかもしれない。それに対して、B 写本やL 写本の写字生は、*drihten* の使用に抵抗感がなかったであろう。

ノルマン人の征服後の中英語の成立には、ノルマンフランス語からの語彙の借用と共に、中部・北部の旧デーン法地域の英語が中心的な役割を果たした。一二世紀が中英語成立の最初期に当たることから、キリスト教の「神」を表す語としての *God*、言い換えれば、固有名詞用法の *God* が定着したのはこの頃であったとみられる。

#### 四 結語

小論では、*God* がキリスト教の神を表す語として定着した時期を、『古英語版旧約聖書(七書)』の異本であるケンブリッジ大学図書館蔵の写本を中心に考察した。

イングランドがヴァイキングの侵略を受けたために、ラテン語による聖職者教育が困難になったことが、古英語による聖書の翻訳が行われるようになった原因となった。更に、ノルマン人による征服後、旧デーン法地域である北部の英語の影響下に中英語は成立した。

アルフリッチが旧約聖書の『七書』を翻訳したのは一一世紀であるのに対して、ケンブリッジ大学図書館蔵のC 写本は作成された一二世紀の英語を反映したために、*God* の使用が優勢であると考えられるのである。小論では、この語の変遷の一面を示した。

## 謝辞

二〇一二—一三年の特別研究期間中、ケンブリッジ大学クレアホールコレッジの客員研究員としてケンブリッジに滞在した。同大学図書館写本閲覧室において小論で取り上げた写本を閲覧し、撮影する許可を受けることができた。研究上の便宜を図っていたいただいた同コレッジとケンブリッジ大学図書館の関係者各位に感謝申し上げます。

## 注

- (1) ベーダによる原著はラテン語によるもので、アルフレッド王による翻訳事業によって、『古英語版英国教会史』が作成された。
- (2) 著名な言語学者・文化人類学者であるE・サビアは、今日の「ケルト人」(アイルランドのゲールリック人、マン島人、スコットランドのゲールリック人、ウエールズ人、ブルタニユー人)は人種でなく、ケルト語系統であると考えている(サビア 安藤訳一九九八、三二六頁)。また、歴史的事実について、「侵入者のゲルマン人種族(アングル人・サクソン人・ジュート人)は、イングランドのケルト人を絶滅したのではなかったし、また、ウエールズやコーンウォールへまったく駆逐したのではなく…、かれらと混ざりあいその法律と言語を押しつけたにすぎない」と信じてよい理由はたくさんある」と述べている(同書、三六二頁原注)。
- (3) ラテン名(Augustinus)にしたがって、アウグステイヌスと書かれることがあるが、古代教父のアウグステイヌスと紛らわしいので、英語名(St. Augustine)にしたがって、オーガステインとする。
- (4) アイルランドの聖コルンバヌス(St. Columba, 521?-597)が、聖オーガステインがブリテン島に派遣される以前にスコットランドで宣教を始めていた。カトリックとは異なる教義を持っていたために、後にカトリックの教義に統一されることになった。

- (5) Lees (1999: 89) によれば、アルフリッチ (*Aelfric*) の説教集の製作は、ベネディクト派の改革 (*Benedictine Reform*) 後であるが、その精神に従っている。また、同書 (Lees (1999: 115)) によれば、アルフリッチらによるマングロ・サクソンのキリスト教育の歴史的差異は知識の真理を伝えるための論理的基礎にあった。それは、イギリスにおける一六世紀の宗教改革でアングロ・サクソン研究が復興する背景となった。
- (6) ケンブリッジ大学図書館所蔵の写本 (MS, Cambridge University Library, H. 1. 33) は『七書』の完本ではな<sup>ら</sup>ず。
- (7) 古英語に翻訳された聖書は、ラテン語聖書 (*Vulgate*) であるので、『リームス・ドゥエイ聖書』(*Rheims-Douay*) による近代英語訳を示す。
- (8) 『ウエストサクソン福音書』では *drihten* が「主」(*the Lord*) を意味するのにも使われる。また、*God* も併用されている。

#### 参考文献

- Crawford, S. J. (1922). *The Old English Version of the Heptateuch: Aelfric's Treatise on the Old and New Testament and his Preface to Genesis*. EETS 160. London : Oxford University Press. Reprinted with additions by N.R. Ker (1969).
- Jack, G., ed. (1994). *Beowulf: A Student Edition*. New York : Oxford University Press.
- Lees, Clare A. (1999). *Tradition and Belief: Religious Writing in Late Anglo-Saxon England*. Medieval Cultures Vol.19. Minnesota, London : University of Minnesota Press.
- Linza, R. M. (1994). *The Old English Version of the Gospels. Early English Text Version*. Volume One. Text and Introduction. EETS 304. Oxford : Oxford University Press.
- Magenis, H. (2011). *The Cambridge Introduction to Anglo-Saxon Literature*. New York : Cambridge University Press.
- Marsden, R. (2004). *The Cambridge Old English Reader*. Cambridge : Cambridge University Press.
- \_\_\_\_\_ (2008). *The Old English Heptateuch and Aelfric's Libellus de Veteri Testamento et Novo*. Vol. One : Intro-

duction and Text. EETS 330. New York : Oxford University Press.

大沢一雄 (一九九二) 『アングロ・サクソン年代記研究』。株式会社ニューカレントインターナショナル。

サピア・E、安藤貞雄訳 (一九九八) 『言語——ことばの研究序説』。岩波文庫青686・1。岩波書店。(Sapir, E. (1921). *Lan-*

*guage: An Introduction to the Study of Speech*. New York : Harcourt, Brace and Company. を底本とする全訳)

高橋博 (二〇〇八) 『ヘータ英国民族史』。講談社学術文庫18692。講談社。(Miller, Thomas ed. (1890-1898). *The Old*

*English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*, EETS 95-96, 110-111. London : Oxford Uni-

versity Press. Reprinted (1959-1963). を底本とする全訳)

寺澤盾 (二〇一三) 『聖書でたどる英語の歴史』。大修館書店。

## 二次資料

*Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM (v. 4.0)*. New York : Oxford University Press, 2009.